

第5節 サウジアラビアの対シリア政策 ——「アラブの春」以降の政策の変遷

近藤 重人

サウジアラビアはシリアが「アラブの春」の煽りを受けて混乱する中、基本的にはアサド（Bashar al-Assad）政権と対峙する反体制派を支援し、イランと近い関係にある同政権の打倒を目指してきた。しかし、2015年9月のロシアの空爆以降にアサド大統領がその優位を固め、2018年3月には米国がシリアからの撤退を表明、同年12月にはUAEなどもシリアとの外交関係を回復させるなど、サウジアラビアの意図せぬ方向に事態は推移してきた。サウジアラビアは2020年初頭でも2015年12月に国連安全保障理事会で採択された決議2254号に基づき、シリアが新しい憲法と政府を設け、その過程においてアサド大統領が辞任することを政策の基本目標としているが、それが実現する見通しは一層立たなくなっている。

(1) シリアにおける「アラブの春」への対応（2011年3月～2015年9月）

2010年末にチュニジアに端を発した民主化要求運動「アラブの春」は、2011年3月にシリアに波及した。サウジアラビアのアブダッラー（Abdullah bin Abdulaziz）国王は当初、イランと近い関係にあるアサド政権が倒れることよりも、同政権の崩壊によって「アラブの春」の勢いが拡大することを恐れ、アサド政権には暴力ではなく改革によって、この反体制運動を収束させることを期待した。そのため、3度にわたって自身の息子であるアブドゥルアジーズ（Abdulaziz bin Abdullah）副外相（当時）をシリアに派遣し、アサド政権に反体制派に対する鎮圧を止めるよう説得した。しかし、アサド大統領は一度も彼との面会に応じず、アブダッラー国王の怒りを買った¹。おそらくはこのことが直接のきっかけとなり、アブダッラー国王はそれまでのアサド容認の姿勢を180度転換し、同年8月にアサド政権による殺戮は容認できないという旨の声明を発表し、在シリア大使を召還した。そして、シリアの反体制派に対する武器支援も試みられるようになった。

2012年7月にバンダル・ビン・スルターン（Bandar bin Sultan）王子が総合諜報庁長官に就任すると、シリアの反体制派に対する武器支援がさらに本格化した。同年12月からはサウジアラビアが購入したと見られるクロアチア製の武器がヨルダンを経由してシリアの反体制派に流入したと見られている²。サウジアラビアは反体制派の中でも世俗的な自由シリア軍（Free Syrian Army: FSA）を支援したが、同軍の弱さが明るみになると、2013年9月頃からはイスラーム軍（Jaysh al-Islam）の支援に力を入れるようになったと報じられている³。なお、サウジアラビアがこうした支援を行う中、米国のオバマ（Barack Obama）政

権は2013年8月にアサド政権への攻撃を見送ったため、サウジ側は大きく落胆することになった。

外交面では、2012年11月にサウジアラビアはシリア国民連合（National Coalition for Syrian Revolutionary and Opposition Forces）をシリアにおける唯一の正統な代表と認めるようになり、特に2013年6月から2014年7月まで議長を務めたアフマド・ジャルバ（Ahmad Jarba）は、サウジアラビアにも多くいるシャンマール族出身で、同国と近い関係にあった。

(2) ロシア軍事介入後の戦略の練り直し（2015年9月～2017年3月）

2015年6月にムハンマド（Muhammed bin Salman）副皇太子はロシアのサンクトペテルブルクを訪問し、プーチン大統領と会談した。そして、翌7月に、サウジアラビアはロシアの仲介により、シリアのアリー・マムルーク（Ali Mamlouk）国家安全保障局長を秘密裏にサウジアラビアに迎えた。しかし、サウジアラビアは、イランとシリア派民兵が撤退すれば反体制派支援を止める、国連監視のもとで大統領・議会選挙を行うべきという従来の主張を変更しなかったため、会談は物別れに終わった⁴。ロシアとしては早期のアサド政権のアラブ世界への復帰を意図していたと見られるが、情勢はまだ完全にアサド政権優位とも言えず、サウジアラビアはロシアの要請に満額回答する段階にはまだなかった。

しかし、ロシアは2015年9月末にシリアで空爆作戦を開始し、シリア情勢はアサド政権に有利な方向に大きく転換した。2016年12月にはアサド政権が反体制派の拠点であったアレッポを掌握した。こうしたアサド政権側優位の流れの中で、サウジアラビアは反体制派への武器支援を行う意義を見出せなくなり、それを停止するに至った。たとえば、2017年8月にサウジアラビアの首都リヤドで開催された反体制派の会合で、ジュベイル（Adel al-Jubeir）外相はシリア問題への関与を減らすと語り⁵、反体制派の最高交渉委員会のナスル・ハリリー（Nasr Hariri）も軍事支援が2017年末に終了したと語っている⁶。

他方、反体制派をまとめるというサウジの外交的な役割は継続し、そのことはアサド政権を支持しているロシアも了承しているようである。2017年11月にはリヤドで反体制派の最高交渉委員会の会合が開催され、アサド政権の退陣を主張した⁷。2018年8月にはジュベイル外相がロシアを訪問し、シリア紛争の政治的解決が必要という立場を再表明した。また、同年9月のイドリブ合意については「素晴らしい合意」と支持し、ロシアの努力を評価した。

(3) 米国の姿勢軟化とサウジアラビアの対応（2017年3月～2018年12月）

(a) アサド政権への姿勢の変化

ロシアがシリアに軍事介入する中、米国でもアサド容認はやむを得ないという見方が出てきた。たとえば、2017年3月にはヘイリー（Nikki Haley）国連大使（当時）がアサド退

陣にこだわらないと発言し、ホワイトハウスのスパイサー（Sean Spicer）報道官（当時）もアサド統治という政治的現実を受け入れると発言、こうした姿勢はサウジアラビアでも紹介された。なお、同年4月に米国が化学兵器を使用したとしてアサド政権に対して空爆を行ったことをサウジアラビアは歓迎したが、米国としてはそれ以上の本格的な対シリア軍事介入を行う意思はなく、アサド政権の完全な打倒はやはり遠い目標であった。

2018年3月にはサウジアラビアにおいてもアサド大統領の在位を容認しているとも捉えられる発言が見られた。たとえば、ムハンマド皇太子が米国のタイム誌において、シリアがイランと関係を断ち切るという条件で、アサドは留まることができるという趣旨の発言を行った⁸。ただし、翌月のドゥーマ市での塩素ガスの使用疑惑が起こった後、ムハンマド皇太子は「アサドは留まる」という発言は現状を述べたもので、政策を語ったものではないと自らの発言を修正し、再びアサド政権は退陣すべきという従来の姿勢を示した⁹。

(b) 米国のシリアからの撤退

米国のトランプ政権はかねてからシリアにおける活動について、サウジアラビアなどのアラブの友好国が肩代わりするべきという態度を取ってきた。同政権が結成に尽力している中東戦略同盟（Middle East Strategic Alliance: MESA）も、シリアに展開している米軍をサウジアラビアなどのアラブ諸国軍に置き換えることを大きな目標としている。さらに、2017年末には米軍がシリアに留まって欲しいなら40億ドルを拠出するようトランプ大統領がサウジアラビアに要求したとされている¹⁰。

これとの直接の関係は不明であるが、サウジアラビアは同じ頃、財政面については一定程度シリアの復興に貢献する姿勢を見せた。そうすることで、米軍がクルド系勢力とともに「イスラーム国」から解放したシリア北東部の安定に貢献しようとしたと考えられる。たとえば、2017年10月にサーマル・サブハーン（Thamer al-Sabhan）湾岸担当国務相がシリア北東部を訪問し、同勢力と接触を持った。そして、2018年8月にシリア北東部の復興に1億ドルを拠出すると表明した。

米国は「イスラーム国」の支配領域がほぼ消滅したことを契機に、2018年12月にはついに米軍のシリアからの撤退を表明した。サウジアラビアとしては、米軍のシリア駐留がイランのシリアでの一部の活動をけん制する役割を演じていることを高く評価していたため、サウジアラビアのメディアなどではこの突然の発表に対する不満が表明された。他方、サブハーン湾岸担当国務相は2019年6月にもシリア北東部を訪問し、米軍や現地の部族と会談したが、これは米軍撤退後の同地域に対する関与のあり方を検討するためのものであったと見られる。

2019年10月には米軍のシリア北東部からの撤退が完了したが、この機を捉えてトルコがシリア北東部に侵攻し、サウジアラビアはそれを強く非難した。サウジアラビアは同地

域への経済支援を計画していたこと、また2018年10月のトルコにおけるサウジ人記者殺害事件を機に両国関係が悪い状態が続いていたこともあり、同国によるシリア侵攻は看過できなかった。なお、トルコの侵攻に際して、サウジアラビアが接触をもっていたシリア北東部のクルド系勢力は、アサド政権への接近を試みており、それがサウジアラビアのアサド政権への政策にどのような影響を及ぼすかが注目される。

(4) アサド容認の波にまだ乗らないサウジアラビア (2018年12月～)

アラブ諸国の間ではアサド政権が優位を確立したことを受けて、同政権との外交関係を復活させる動きが出てきた。たとえば、2018年12月にはスーダンのバシル（Omar al-Bashir）大統領がシリアを訪問したが、その背後にはアサド政権のアラブ世界への復帰を後押しするロシアの働きかけがあったとされる。また、2018年12月にはUAEが在シリア大使館を再開し、外交関係を復活させている。UAEについては、アサド政権と接近することによって、同政権にシリア国内のムスリム同胞団の活動の取り締まりを期待しているという見方もある¹¹。同国は、「アラブの春」以降、ムスリム同胞団に対する取り締まりを強化してきた。

アサド容認の波は、サウジアラビアの強い影響下にあるバハレーンにも及んだ。同国の外相は2018年9月に国連でシリアの外相と接触し、UAEが大使館を開設した翌日に在シリア大使館を再開させた。バハレーンがサウジアラビアの制止を振り切って外交関係の再開に踏み出したとは考えにくく、おそらくはサウジアラビアの黙認の下、外交関係の再開に乗り出したと考えられる。そうであるのならば、サウジアラビアは完全にはシリアのアサド政権を拒絶していないのかもしれない。

ただし、サウジアラビアは公式レベルでは少なくともまだアサド政権の容認には動いていない。2019年1月にはシリアの側からサウジアラビアにアプローチがあり、マムルーク国家安全保障会議議長がサウジアラビアを極秘訪問し、関係改善について協議したが、突破口は開かれなかった模様である。同月には、ヨルダンで開催されたアラブ6か国外相会議でUAE、バハレーン、エジプト、ヨルダンがシリアのアラブ連盟復帰をサウジアラビアに説得したが、同国はそれに応じなかった。

同年3月にはジュベイル外務担当国務相が、シリアの「アラブ連盟復帰は時期尚早」との見方を示し、同月にはブリュッセルでイランの部隊とイランが支援する民兵が撤退すべきと発言した。同年5月にはサルマーン（Salman bin Abdulaziz）国王がマッカで開催されたアラブ・サミットでイランのシリアへの介入を非難している。同年10月のプーチン（Vladimir Putin）大統領のサウジ訪問でもシリアについて何らかの意見交換はされたはずであるが、会談後も特にサウジ側の態度に変化は見られなかった。

サウジアラビアはこれまでもイランに近い勢力とイランの間に楔を打ち込む目的で、あ

えてそうした勢力に接近することがあった。たとえば、2017年にはそれまで対立していたイラクのシーア派政権に急接近した。しかし、おそらくサウジアラビアにとってシリアのアサド政権は、当時のイラクのシーア派政権と比べても、イランとの関係が強固でありすぎると判断しているのだろう。アサド容認の波がサウジアラビアにまで到達するにはまだ月日がかかると考えられる。

— 注 —

- 1 Christopher Phillips, *The Battle for Syria: International Rivalry in the New Middle East* (CT: Yale University Press, 2016), p. 68.
- 2 “Saudis Step Up Help for Rebels in Syria With Croatian Arms,” *The New York Times*, February 25, 2013 <<https://www.nytimes.com/2013/02/26/world/middleeast/in-shift-saudis-are-said-to-arm-rebels-in-syria.html>>, accessed on January 6, 2020.
- 3 “Syria Crisis: Saudi Arabia to Spend Millions to Train New Rebel Force,” *The Guardian*, November 7, 2013 <<https://www.theguardian.com/world/2013/nov/07/syria-crisis-saudi-arabia-spend-millions-new-rebel-force>>, accessed on January 6, 2020.
- 4 2015年8月8日付 Ahram 報道「ハヤート：ロシアの仲介でサウジ・シリア会談開催」<<http://gate.ahram.org.eg/News/722178.aspx>>, accessed on February 10, 2020.
- 5 “Victory for Assad Looks Increasingly likely as World Loses Interest in Syria,” *The Guardian*, August 31, 2017 <<https://www.theguardian.com/world/2017/aug/31/victory-for-assad-looks-increasingly-likely-as-world-loses-interest-in-syria>>, accessed on January 6, 2020.
- 6 “Syrian Opposition Says U.S. Cannot Afford to Leave Syria Yet,” *Reuters*, April 23, 2018 <<https://uk.reuters.com/article/uk-mideast-crisis-syria-opposition/syrian-opposition-says-u-s-cannot-afford-to-leave-syria-yet-idUKKBN1HU14G>>, accessed on January 6, 2020.
- 7 “Syria Opposition Meeting in Riyadh Sees No Role for Assad in Transition,” *Reuters*, November 23, 2018 <<https://www.reuters.com/article/us-mideast-crisis-syria-opposition/syria-opposition-meeting-in-riyadh-sees-no-role-for-assad-in-transition-idUSKBN1DN1BB>>, accessed on January 6, 2020.
- 8 “Crown Prince Mohammed bin Salman Talks to TIME About the Middle East, Saudi Arabia’s Plans and President Trump,” April 5, 2018 <<https://time.com/5228006/mohammed-bin-salman-interview-transcript-full/>>, accessed on January 6, 2020.
- 9 “Saudi Could Take Part in Military Response in Syria: Crown Prince,” *Reuters*, April 10, 2018 <<https://www.reuters.com/article/us-mideast-crisis-syria-ghouta-saudi/saudi-could-take-part-in-military-response-in-syria-crown-prince-idUSKBN1HH26L>>, accessed on January 6, 2020.
- 10 “Trump Wants to Get the U.S. out of Syria’s War, So He Asked the Saudi King for \$4 Billion,” *The Washington Post*, March 17, 2018 <https://www.washingtonpost.com/world/national-security/trump-wants-to-get-the-us-out-of-syrias-war-so-he-asked-the-saudi-king-for-4billion/2018/03/16/756bac90-2870-11e8-bc72-077aa4dab9ef_story.html>, accessed on January 6, 2020.
- 11 “Why Did the UAE and Bahrain Re-open Their Embassies in Syria?” *Al Jazeera*, January 8, 2019 <<https://www.aljazeera.com/indepth/opinion/uae-bahrain-open-embassies-syria-190107165601089.html>>, accessed on January 8, 2019.

